

## ハイデガー・フォーラム第十回大会を終えるにあたって

森 一郎 (東北大学)

記念すべき第十回大会の全日程を終えるにあたり、安部浩さんのお許しを得て、ごく手短にお話しさせていただきます。

2006年の第一回大会から数えるとじつはまだ九年しか経っていませんが、それ以前に創立準備期間が二年間ほどあり、2005年夏には京都で準備のための会合をもちました。なので、「創立十周年」と言っても間違いではないことになります。

第一回大会は、伊藤徹さんに、初日のトリを務めていただきました。その伊藤さんと大会前の準備でお会いしたとき、激励半分にこう言われました。「新しいことを始める場合、十年もてばいい。あとはもう終わりでもいい」。笑って受け流しながら、内心ムツとしました。しかし、次第にその言葉が重くのしかかってくるのを感じました。

たしかに、言い尽くせぬほどいろいろなことがあった十年間でした。大きな出来事としては、2011年3月、東日本大震災がありました。ハイデガー・フォーラム自体は、毎年着実に歩みを続けてきた一方で、ゆかりの方々が亡くなられました。まずもって、第一回大会の伊藤さんの発表は、その少し前に亡くなった溝口宏平さん(1946-2006)追悼の意が込められていました。ハイデガー研究を長らく牽引されフォーラムの賛同人でもあった、川原栄峰さん(1921-2007)、渡邊二郎さん(1931-2008)、辻村公一さん(1922-2010)、門脇俊介さん(1954-2010)を、われわれは喪いました。昨年は、木田元さん(1928-2014)が、今年に入ってからは、フォーラムの常連だった岩田靖夫さん(1932-2015)、第一回大会で華々しく発表くださった港道隆さん(1953-2015)が、逝去されました。綺羅星のような先達の学恩に感謝するとともに、謹んでご冥福をお祈りいたします。

ハイデガー・フォーラムは、毎年それなりに盛り上がったような気が私はしますが、そうでもなかったと思う方もおられることでしょう。創設以来、イベント性——つまり出来事性——を大事にしてきましたが、十年も経つとマンネリに陥る危険が増します。今後ますますパフォーマンス性——つまり遂行性——を追求していかなくてはなりません。そのための千載一遇の好機を、われわれはこのたび思いがけなくも与えられました。総会で先ほど発表のあった「ハイデガー・フォーラム渡邊二郎賞」です。

順調に続いてきたかに見えるハイデガー・フォーラムにとって、当初から悩みのタネだったのが、発表希望者の応募が多くなかったことと、応募発表枠の公開審査にあたっての支持票の投票が少なかったことです。その弱点を克服し、かつ大会当日の盛り上がりの後押ししてくれそうなのが、応募発表者の間で競われる賞金十万円獲得レースです。大会がそっくり受賞コンクールと化し、その場の聴衆全員が審査員となるのですから、面白くないはずがありません。とはいえ、油断は禁物です。故人そして遺族からいただいたせっかくの篤志をムダにしてしまう危険は、つねに付きまっています。

そこで、思いも新たに、皆さんにここで呼びかけたいと思います。

空虚な業績作りでも、ただの見世物でもなく、真剣勝負の哲学的討議を思いっきりぶつけ合うという、フォーラム創設時の志を、われわれはもう一度確かめ合おうではありませんか。世界の関節が外れてしまったようなこの危機の時代にこそ、哲学に輝きを取り戻そうではありませんか。十年前に誓い合った初志、しかし居眠りし始めているかもしれない初志を、ふたたび目覚めさせようではありませんか。呑気に物を考えることは楽しい、遠慮会釈なく自由に議論を戦わせることは快感だ、——われら哲学マニアどもに共通のこの根本確信を、今の世に発信し続けていこうではありませんか。

あらたな始まりを、皆さんと一緒に築いていけることを心強く、嬉しく思います。来年、名古屋大学で開かれるハイデガー・フォーラムで、また元気にお会いしましょう。

\* 付記——大会終了直後、虫明茂さんの訃報を伝え聞いた。就実大学のウェブサイト内にハイデガー・フォーラムのホームページを気前よく立ち上げていただき、その管理を長らく担当くださった、われわれの頼もしい賛同人のお一人であった。ご冥福をお祈り申し上げたい。

Ichiro MORI

*Grüße am Schluß der zehnten Tagung  
vom Heidegger-Forum in Japan*